
Magic Birth Day

翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M a g i c B i r t h D a y

【Nコード】

N 0 1 3 9 M

【作者名】

翠

【あらすじ】

【快斗×蘭】快斗は誕生日を蘭に祝って欲しいと思っているが…
拍手おまけ話あり

パンパンパンパン！

小さな爆発音が連続で鳴り響いたかと思うと、教室のドアをくぐった黒羽快斗の頭上へと紙吹雪が舞い降り、快斗はあっという間に色とりどりの紙まみれとなった。

「…………え」

考え事をしながら教室に入ってきていた快斗は、とっさに左胸を押さえた手はそのまま、目をまん丸にして固まっていた。

「おはよう、快斗」

「お、おはよう…………青子」

目の前には満面の笑みを浮かべて、煙がかすかに立ち昇るクラッカーの束を握り締めている幼なじみの中森青子の姿。その周りには、同じくクラッカーを握り締め、いたずらっぽい笑みを浮かべたクラスメイトたち。

「…………な、なんだあ？」

物騒な想像は思い過ぎだと理解したものの、状況が飲み込めずにいた快斗を見て、青子たちはなにやら相談をはじめた。

その相談が終わったのか、青子が振り返ると同時にクラスメイトたちが一斉に快斗を見る。そして、にんまりと笑ったかと思うと快斗の頭上に向けてクラッカーを鳴り響かせた。

「快斗、誕生日おめでとー！！」

「……え」

今度は先ほどとは違う驚きで固まっている快斗に、青子は頬をぷうと膨らませて呆れたように快斗をみる。

「もう、自分の誕生日も忘れちゃったの？　せつかくみんなでお祝いしてるのにー」

「え、あ、いや、驚いてるだけだつて。まさか、クラス全員から祝ってもらえるなんて思ってもなかったからな……ありがとな、みんな」

快斗は感慨深げにクラスメイトたちを見渡した。みんな口々に、快斗にお祝いの言葉を投げかけてくれている。

「快斗は、いつも私たちを驚かせたり楽しませてくれたりするから、たまには驚かせちゃえって思って、青子が準備したの。クラッカーは紅子ちゃんだよ」

頬をほんのりと桜色に染めて自慢げに胸をそらす青子に、快斗は目を細めた。

やさしい幼なじみ。
かわいい幼なじみ。

?? 不意に青子に似ている少女の笑顔が重なる。

快斗は幻を振り払うかのように首を振ると、微笑んで青子と紅子を見た。

「ありがとな、青子」
「うん！」

「紅子も、ありがとな」
「どういたしまして」

休み時間のたびに携帯とにらめっこをしていた快斗は、放課後となると机に突っ伏して盛大なため息をついた。

「あーあ、やっぱり知らないよなあ……」

「何が知らないの？」

頭上から青子の声がしたので、快斗はあわてて顔を上げ答える。

「なんでもねー」

「そう？ あ、そういえば門のところに他校のきれいな女の子が立ってるんだって」

「ふーん」

「それがね、青子に似てるみたいで、青子見に行っちゃおうかなって思ってるんだ……って快斗！？」

快斗は、青子の話を聞き終わる前に教室を飛び出していた。

？？青子に似ている、他校のきれいな女の子？？

女の子の立っているであろう位置はすぐにわかった。

校門付近で、うちの生徒が通り過ぎるたびに、そちらに視線を向けては何事かを囁きあっているためである。

「パンダかよ……」

快斗は呆れながらも、自分もその女の子を見に来た生徒の一人なのだと思い至り、オレは理由があるからいいよな、と誰にともなく言い訳をする。

そして、期待してはだめだと自分に言い聞かせつつも、はやる心は抑えられず、勢いよく女の子の前に飛び出してしまった。

「あ……」

快斗の頬が緩む。

江古田高校の校門前で立っている『他校のきれいな女の子』とは、群青色の帝丹高校のブレザーに身を包んだ毛利蘭だった。

「快斗くん」

注目を浴びていたのが居心地悪かったのか、快斗を見た瞬間、彼女はともほつとした顔をして、うれしそうに微笑んだ。

「蘭……ちゃん。どうして、ここに？」

蘭はそれには答えず、首をかしげてさらに魅惑的に微笑むと、力ウントダウンを始めた。

「One、Two……Three!」

掛け声とともに、彼女の右手には一輪の白いバラの花が現れ、快斗の目の前に差し出される。

「誕生日、おめでとう!」

「……………」

「……………あれ?」

「……………」

「やだ、わたし間違えてた!」

彼女の、ほんのりと赤く染まっていた頬はさらに赤くなり、笑顔がみるみるうちに曇っていった。

快斗としては、朝から驚きの連続で、これ以上驚くことはないと思っていたのだが……一番会いたかった少女が、恥ずかしそうに頬を染めながら、一所懸命練習したであろうマジックで祝ってくれている??この事実が、快斗から言葉を奪っていた。

「あ、あの……ごめんね、わたし、勘違いしてたみたいで……」

蘭が身を翻して駆けだそうとしたところを、一瞬早く快斗が我に返り、腕をつかんで止めた。

「待って。蘭ちゃんあってるよ」

「え？」

驚いて振り向いた蘭の、困ったような驚いた顔をみて、快斗の心臓がドクンと脈打つ。

「ごめん！ 蘭ちゃんがオレの誕生日を知っていて、しかも祝ってくれるなんて思ってもいなくて……それで驚いて反応できなかったんだ」

「あ……」

快斗がつかんでいた蘭の腕から力が抜けた。

「よかった……」

「ホント、ごめん。蘭ちゃん」

「うっん。いいの。でも、本当によかった。私、日にちを間違えて覚えていたんだと思ってあせちゃった。連絡もせず内緒にしていたのに、バカみたいだなあって」

「何言ってるの。たとえ間違えていたとしても、大歓迎だよ。全然バカみたいじゃないよ。オレは蘭ちゃんはその気持ちがうれしいんだからさ」

快斗は、携帯とにらめっこをして過ごしていた時間が嘘のようだと、蘭の安心したような笑顔を見て暖かい気持ちになった。

きつと今の自分は誰が見ても幸せそうに見えるに違いないと思う。

??うわー。やべー……ニヤニヤが止まんねー……。

「蘭ちゃん、これ、もらっとくね」

快斗がつかんでいた蘭の腕を離すと、その手には蘭がしまいこんだはずのバラの花があった。

「あ……」

いつのまにか快斗の手の中にあるバラの花に、蘭は一瞬戸惑ったが、すぐに快斗に笑顔を見せた。

「誕生日、おめでとう。快斗くん」

「ありがと、蘭ちゃん。マジック、そうとう練習したろ？ すごくうまかったからさ」

「ほんと？ 快斗くんに褒められたら調子に乗っちゃうよ」

「マジマジ。調子に乗っていいよ」

「ありがとう。快斗くんにお花をもらったとき、すごくうれしかったから、私もやってみようと思って練習したの」

照れくさそうに耳に髪をかける蘭に、快斗は目を細めた。

「ありがとう。蘭ちゃん。最高のプレゼントだよ」

快斗は蘭の頭をぽんぽんとなでた。

「蘭ちゃん素質あるし、オレと一緒にマジックで世界を周る？」

「…………え？」

「名探偵の嫁をやるより、スリリングで楽しいことは保障するぜ」

「快斗くん…………」

蘭の困ったような、でも恥ずかしがっているような複雑な表情を見て、快斗はフツと笑った。

「なんてね。で、蘭ちゃん。オレたち相当目立ってんの、知ってた？」

「え？」

「まあ、他校の生徒が来るといっただけでも注目されるんだけどね

…………」

蘭ちゃんの場合、相当かわいいしな。

快斗は、自分たちを遠巻きながらも見ている、嫉妬や羨望の入り混じった視線を敏感に感じ取っていった。

「ごめんね、快斗くん」

しゅんと申し訳なさそうにうなだれる蘭を見て、快斗は慌てた。

「だから、オレは大歓迎だって。ただ、オレが蘭ちゃんを他のヤツらにジロジロ見られたくないだけ。だから……」

快斗は蘭の耳元に口を寄せた。

「この美しい花のお礼に、わたくしめに甘いデザートをプレゼントさせて頂けませんか？ 純白のバラの花より美しいお嬢さん」

蘭の耳が真っ赤に染まると同時に、快斗は蘭の手を取って走り出した。

「うーん。さすがに、かつこよくさらっていけないのが残念！」

快斗は茶目つ気たつぷりに蘭にウィンクして見せた。

「もう、快斗くんったら」

離さないようしっかりと、でもやさしくつながれた手から彼女のぬくもりが伝わる。そして、振り返ると快斗に応える彼女の笑顔。

快斗は、冗談めかしてプロポーズした時の彼女の反応を思い出し、不敵な笑みを浮かべた。

今はこれで十分。本当の勝負はこれからだぜ？ 名探偵。

彼女の中に、オレという存在が小さくなく、あるということがわかったからな。

快斗は、蘭の中に確かに存在する“最も出会いたくない恋人”に向けてつぶやいた。

(後書き)

2008/06/21 快斗誕生日記念のものです。

拍手おまけ話あり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0139m/>

Magic Birth Day

2010年10月10日01時04分発行